

The World Times -7月号-

1-9 成田愛唯 2-6 田中奨悟

今月号では、SDGsに関わる仕事をしている方にインタビューをした結果を掲載します。コミッションエンジニア（施設の運転開始をサポートするエンジニア）として現在活躍しているアメリカ在住 ポール・チェバコさんに話を聞きました。

Q. どのSDGsが仕事と関係していますか？

A. 僕の仕事はエネルギーや電気を作ることに関連しているから、7、エネルギーをみんなに、そしてクリーンに”だね。きれいで安くて環境に優しい方法で作った電気を消費者に提供するんだ。

Q. SDGsを考慮したとき、仕事はどのように変わりましたか？

A. 全てが変わったよ。自分たちの会社は石炭火力の発電所の建設を一切ストップすると公表した。他にも、古い発電所を建て替えた時に、そこでは温水が流れ出るのでマナティがよく来ていたんだけど、取り壊しが始まると温水が流れ出なくなって、マナティも来なくなってしまったんだ。それで12メガW（大体何百何千個家で使われる電気の量）出力のヒーターとポンプを設置したらマナティは戻ってきた。会社は環境に配慮している。

Q. 逆に考慮しないと、仕事はどのように変化すると思いますか？

A. 環境に悪いのは勿論なんだけど、仕事にもメリットがないところかデメリットしかないんだよね。仕事は無くなるし、優秀なエンジニアは離れていくして。だから無視するなんてありえない。

Q. 現在直面している問題はありますか？

A. 最近の社会変化に伴って、仕事上のあらゆる過程を改善しなきゃいけないようになったね。例えば、システムが複雑化してきたんだけど、それを制御するために冷蔵庫大の高価なデバイスが必要になったかな。

Q. 個人的にはどのSDGsが最も重要だと感じますか？

A. 自分としては”7”だけど、他のものがより大切な人もいるだろうしね。どれも重要だからこそ、SDGsは国際的指標なんじゃないかな。

Q. あなたが関われないSDGsはどれですか？

A. “4,質の高い教育をみんなに”と“5,ジェンダー平等を実現しよう”かな。でも結局全部なにか関係あるんだ。

Q. アメリカではどのような問題が最も叫ばれていますか？

A. 気候変動、二酸化炭素の排出、山火事。そしてあらゆる面での不平等、が顕著だね。

Q. 今のままでSDGsは達成できると思いますか？

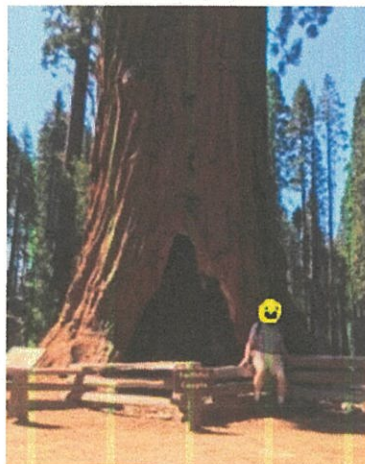
A. もちろん無理だね。いろんなことを変えなきゃいけない。それも今すぐ、ここから変えていかなくちゃね。

Q. どんな時に変わらなければいけないと感じますか？ A. いつも。今。毎日。

Q. SDGs達成に向けて最も大切だと思うことは何ですか？

A. 新世代を育成して、あらゆる分野で新しい方法を開拓することが欠かせない。あと世界中の協力もだね。

※本人のご希望により顔は伏せています



●今回、特に関連性のあるSDGsからインタビューを分析

“6, 安全な水とトイレを世界中に”

→今回は言及されていませんでしたが、ポールさんはコミッションエンジニアとして様々な仕事に携わってきています。その中で発展途上国も含めて全世界での水道の整備にも関わってきました。

“7, エネルギーをみんなにそしてクリーンに”

→左にも書いた通り、現在関わっているのは発電所の運用サポートがメインです。その中でも“クリーン”という面で改善すべき点は沢山あるようです。また今回は言及されませんでした。 “みんなに”の面で、作った電力を平等に分配することも重要でしょう。

“10, 人や国の不平等をなくそう”

→インタビューの中では今のアメリカで叫ばれている問題として挙げられました。勿論日本でも問題視されていますが、ポールさんが仕事から目を離した上で、真っ先に思い浮かぶほどアメリカ全体の問題として深刻なのでしょう。

“13, 気候変動に具体的な対策を”

→ポールさんの会社では“石炭火力の建設をストップする”と発表しましたが、SDGsに真剣に解決しようとするのも仕事の一環となっているのは興味深いですね。

“14, 海の豊かさを守ろう”

→マナティの話もありましたが、発電の際、排熱等に関連して水を利用することは大いにあります。クリーンなエネルギーを提供するうえで、この話は切っても切り離せないものなのでしょう。

“15, 陸の豊かさを守ろう”

→ポールさんの会社では石炭火力の発電所の建設をストップすることを公表しましたが、気候変動だけでなく、化石燃料の燃焼に伴う二酸化炭素の排出が陸上の自然に与える影響も大きいでしょう。

“17, パートナースhipで目標を達成しよう”

→SDGs達成に向けて、ポールさんは次世代を育てることも国際協力を挙げています。国際的な目標なので、満足できる達成のために国境をまたいだ協力が必要なのは当然でしょう。インタビュー中でもポールさんが”right now here”主張していたように、SDGsというのは現在直面している問題で、今まさに協力することが求められているのです。

編集後記

今回はエネルギー生産やインフラ整備など、実際にSDGsに大きく関わりのある工業分野の仕事をしているアメリカ人ポールさんにお話を伺い、これについて自分たちなりに分析した結果、発電という一つの分野が様々な問題に絡んでいることを改めて実感しました。先月号のゆうなさんへのインタビューでは貧困問題やジェンダー不平等の話により焦点が当てられていたり、同じエネルギー問題でも先月号では大気汚染の話なのに対し、今月号では環境にやさしく生産する方の話であると、同じテーマの話でも国や状況が変わると話が一变するのは興味深いです。SDGsの重要性の話では、人によってどれが大切が変わるということで、この問題が国際的指標であるとあらためて感じました。こうして大高の皆さんに本記事を見ていただけたことを良かったと感じています。私たちが次世代を担う新世代である自覚を持って行動していくべきだと思います、と大高さんに伝えたいことを書いて本記事を終わることにします。

~Special thanks “Paul Chevako”~



The World Times - 9月号 -

2-5 岡田礼乃 1-7 植野桃子

今月号のWorld Timesは、11月11日に大宮高校で講演をして下さる、瀬谷ルミ子さんが理事長を務める認定NPO法人「REALs」の特集です。

著書「職業は武装解除」は国語科の横山先生お薦め！図書館にあります。また、現在 Reals のHPやTwitterで「アフガニスタン」の生の状況を発信中です。

1. 瀬谷ルミ子さんについて

1977年群馬県生まれ。高校3年生の時にルワンダ大虐殺の写真にショックを受け、紛争地で働くことを決意。中央大学を経て、英ブラッドフォード大学院で紛争解決学を学び、その後、NGO、国連PKO、外務省職員として、DDR分野でルワンダ、アフガニスタン、シエラレオネ、コートジボワール等で活動されました。2007年からは、REALs(旧日本紛争予防センター)で、アフリカ・中東・アジア地域の紛争予防活動を統括しています。

2009年NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」。2011年News Week 日本版「世界が尊敬する日本人25人」、2012年日経ビジネス「未来を創る100人」、日経ウーマン・オブ・ザ・イヤー受賞。

*DDRとはDisarmament(武装解除) Demobilization(動員解除), Reintegration(社会復帰)の略。紛争が終わった後に兵士から武器を回収し一般市民として生活していけるように職業訓練して社会復帰させる活動。

REALsはReach Alternatives. 争いを予防する方法、紛争地での生き方、支援する方法など、今までになかった道を切り拓き、できる限り多くの人々がその選択肢にリーチできるように、という意志が込められています。

2. REALsとは

REALsは、争いを未然に防ぐことを専門分野とする日本のNPOです。支援の専門家がいらない分野や地域を活動フィールドに選び、現地の人材を育てながら「人」を変え、「しくみ」を変え、「社会」を変える活動をしています。

具体的には以下の5つの専門領域を扱い、特に「子供・女性・共存力」の3つを重要課題としています。

1. **争い予防**: 紛争・テロ・社会的な暴力の原因と予兆を分析し、未然に防ぐための早期対応を行い、発生してしまった争いの悪化を防ぐ人材や仕組みを整備する。
2. **共存**: 国籍・民族・宗教・ジェンダー・価値観などによる分断を乗り越え共存するための選択肢を、当事者自らが選び実践できるように支援する。
3. **ジェンダー**: 争いや抑圧で困難な状況にある女性や暴力の影響を受ける人々に必要な支援を届ける。
4. **心のケア**: 争い、暴力、虐待の被害者や加害者に立ち直る拠り所となる心理社会的サポートをする。
5. **緊急支援**: 既に支援している地域や今後紛争予防のニーズがある地域で、命と生活を守る支援。



このような観点から「紛争・テロ・社会的な暴力」を防ぎ、乗り越え、共存できる社会を目指しています。

3. 広報担当の久保さんへのインタビュー

8月20日オンラインで実施

REALsや国際支援団体に関してより深く知る為に、REALsで広報を務める久保さんにお話しを伺いました。

▶REALsについて

○他の支援団体と大きく異なることは？

それぞれのNPOには得意分野があり、多くの団体が被害にあった人を救済する中で、REALsは「争いを未然に防ぐ」ことを専門にしていること。既に専門家がいたりするところではなく、まだ支援が届いておらず、さらに争いを防止することで生活がより良くなると判断できるところで支援をしている。

○3つの重要課題が子供・女性・共存力である経緯は？

長年の経験の中で「支援が最も必要な人は誰か」と考えた時に、自分自身を防御できず犠牲になりやすい子供や、社会的に弱い立場である女性だと考えた。平和を創る上で、そのような人たちの「弱い立場にいた」という経験が活かせるのではないかと期待もある。また、共存力は、どんな人でも人として尊重され、人としての生活をすることを実現させる平和への近道であると考えた。

○現地で支援するにあたって必要不可欠なものは？

日本とは全く違った地で活動するわけだから、その地にあったやり方で活動するという。現地の文化や生活習慣を理解して、「現地の人と一緒に活動する」ということを大切にしている。

○現地の人に支援に関して説明する際、心掛けていることは？

現地の人を否定しないということ。現地で高い地位に就く人のことも尊重しながら活動している。誰に、いつ、どのような話をすれば良いか、現地の状況を調べた上で、考えて伝えている。

○現地の人を支援する際に大変なことは？

自分たちが行っている支援で、現地の人々の暮らしや人生を変えてしまうため、本当によく変化するか、という判断はとても慎重に行っている。また、東京の本部では、現地で支援する人が危険な目にあわずに活動できるか常に気に掛けている。

○今まで行ってきた支援の中で、1番困難だったこと、また、達成感を感じたことは何か？

現地の人々が本当に苦しんでいるのを見るのが多く、それでもすべての人を支援できるわけではないのが辛い。精神的に苦しい面はあるが、だからこそ頑張らなくてはならないという気持ちになる。REALsが行った支援で「地域が良くなった」「争いが少なくなった」という声を直接聞くのが嬉しい。現地の人の中でリーダーが育ち、自分たちだけで出来るようになって、支援を終了する時が1番嬉しい。

○現在支援している国はどのようにして決めたのか？

基本的に瀬谷ルミ子さん及びREALsにとって知識と経験がある地域。全く知らないところに行っても役に立たないから。歴史的、政治的な知識があるところに加えて、支援者がいないところ、専門家がいなくていいところを考えて行くようにしている。

○過去に支援した国で争いが再発しているところがあるが、今後支援を再開することはあるか？

争いを止めることはREALsの活動分野ではないため、今すぐ支援できるとは言えない。争いが終わった後で「争いは何も解決しない」ということを伝え、争いを繰り返さないようにするにはどうすればよいのかという活動をする。

○日本人であることが活かされることはあるか？

ヨーロッパの植民地だった国では、まだ白人に対する反感が強いこともある。その点、日本人は中立の立場にいらることができるのが有利かもしれない。また、差別は相手を感じるものであるため、自分たちでどうできるものではない。その点、REALsは現地人の優秀なスタッフがいるので、彼らが地元の人と話をしている中で理解を得て、スムーズにいくこともある。

○このような支援の分野で働くのに向いている人はどんな人か？

「人を助けたい。」「世の中を良くしたい。」という情熱が常にある人。心身ともにタフであることに加えて、広い視野で物事を捉えられる人が向いている。

○今の紛争地の状況として学生の私たちに1番知っておいてほしいことは？

「中東」「アフリカ」と聞くと、とても遠くのこのように感じるが、そこで起きることは決して日本と無関係ではないということ。遠い国ではあるが、同じ人間の社会として「どうしてこのようなことが起こるのか」という身近な疑問として考えてほしい。そして、自ら争いを起こす人にはならないでほしいというのが REALs の願い。「気に入らない人がいるからいじめてしまおう」と行動に移したら、それはもう争い。日々の生活を振り返って、どうしたら争いがなくなるのかを考えれば、遠い国のことでも共通した考え方が生まれる。

▶お話を伺った久保さんについて

○ REALs での広報のお仕事とは？

職種：ファンドレイザー→寄付を集める仕事！

REALs の活動を多くの人に知ってもらうために、ウェブサイトや SNS などの運営をしている。

多くの人に知ってもらうことによって寄付が増えて、事業が拡大できる！！

関心をもって活動を見て意見を寄せてくれることが、様々な視点が団体にとっても参考になる！！

寄付をしてもらうということは、社会貢献の機会の提供を受けてもらうことだと考えている。いろいろな団体の活動に興味をもって見てみて、共感したところに寄付をしてみて、見ていくうちにやめてもいいし、よかったら続けてもらえばいい。

○この分野を志したきっかけは？

子供のころから世の中は不公平だと思うことがあり、社会を良くしたいという気持ちがあった。REALs の一員になる前は、出版社や新聞社などのメディア関連や会社の広報の仕事を経験し、ファンドレイザーの勉強をしたのは最近。このような経験を活かせるのは NPO などの支援活動だと思い、REALs の広報担当になった。何をやっても、仕事を変えても、住む場所を変えても、今に至るまでの時間がみんなつながって今の自分になっていると感じている。



編集後記

今回の World Times は国際支援がメインテーマの内容でしたが、記載内容を調べたり、インタビューをしたりしていく中で新しく知ることが多くありました。支援団体の方から直接話を聞いたことで1人1人の協力の大切さを知り、今後は自分が気になった支援団体に寄付していきたいという気持ちになりました。また、インタビューさせて頂いた事はとても貴重な経験になりました。(岡田)

REALs や国際支援について調べていく中で、支援には様々な方法があることが分かりました。自分ができるやり方で、何か支援できることはあるか考えていきたいです。一方的なやり方だけが支援ではないということに気づく良い機会になりました。(植野)